



寄贈資料の中から

和菓子の型

沼津市獅子浜で、今年7月まで製菓店を営んでいた西山弘氏から、製菓器具を寄贈していただきました。

この店は吉田屋製菓といい、鹿の子や黄身しぐれなどの生菓子を専門に製作し、卸していました。主な卸し先地域は多比、口野、内浦、西浦で、夏には大瀬の海水浴場へ団子を卸したりもしていたとのこと。

写真の資料は木型の一部とげんべらです。木型は、慶弔用、練切用、供物用があります。練切の型以外は落雁を作るものです。写真左上にある寿の字に亀の図案の型は結婚式用で、西山氏の父の代の昭和5年からある最も古いものです。鯛の型は慶事用で、お客の要望により大きさが違うので型が大中小と多数あります。

左下の5点は法事の引菓子用で、昆布、椎茸、蓮根などの図案が彫られています。右下の持ち手付の2点は寺院の供物用です。

落雁は打ち物と呼ばれ、材料は砂糖とみじん粉です。西山氏によると、落雁のような菓子は、焼きみじんでこねるとしまってくるため、蒸さなくて済むそうです。

菓子木型は主に一枚型と二枚型があり、二枚型の落

雁の型は、図案の入ったものと輪郭を抜いた枠が一組になっています。これら二つの型を合わせてたねを詰め込みます。そして、げんべらで、たねを平らにしたあと枠の縁を叩いて外し、残った型を叩いて菓子を取り出します。こうして型から打ち出した菓子は、蒸籠へ次々に並べていきます。

げんべらは落雁の型にたねを詰める道具です。写真の道具はけやきの木で自作されたもので、使い込んだために指の跡がついています。

練切用の型はあんこを丸く作って入れ、ポンと出すと完成します。スタンプ型のものは押しあてて型をつけるものです。練切は、型を使用して作るものもあれば、竹のへらで細工するものもあります。

三角形の板が三つ繋がったものは、打ち物の団子の型です。これは、型を組み合わせると三角錐状にした中に、たねとなる砂糖を詰め、型を開いて中身を取り出します。西山氏の作るこの団子は、材料のほとんどが砂糖なので、供物として使用してからも使い道がある、とってお客に喜ばれたそうです。

人絹工場を結んだ引き込み線のその後

—東京人造絹糸 沼津・吉原工場跡—

はじめに

先年、本館研究員として沼津の近代的繊維産業について、当時の先端産業であった人絹を中心に調査する機会をいただいた。その過程で、主要な交通手段であった鉄道と人絹工場のつながりに着目した。

本稿では、東海道本線と東京人造絹糸沼津工場・吉原工場を結んでいた引き込み線のその後について述べていくことにしたい。

東京人造絹糸沼津工場のその後

東京人絹沼津工場は、国内の人絹生産がピークであった昭和12年、行政からの工場誘致や先に操業していた近隣の東京人絹吉原工場との連携などを背景にして、沼津駅西北の広大な敷地で操業を開始した。

東海道線沿線という利便性を生かし、人絹の原料や製品（沼津工場はスフが主体で一部は輸出）の輸送に工場内まで延びた引き込み線が役割を果たした。

当時の統計資料に着目してみると、昭和13年における沼津駅の発送貨物は合計約91,700トン、到着貨物は合計約156,000トンとなっている（『沼津市勢一斑』昭和十四年版 沼津市）。ちなみに同じ頃の東京人絹沼津工場は、フル稼働した場合、日産で約30トンの生産設備をもっていったという。残念ながら、工場の生産統計資料が残されていないことから、確実な数値は明らかでないが、沼津駅で取り扱う貨物の一定量に、東京人絹の物が含まれていたことは言える。

先に『沼津市博物館紀要36』の中でくわしく報告したが、東京人絹沼津工場は、太平洋戦争の状況がきびしさを増す中で、当時の国策で民需から軍需への転換を余儀なくされ短期間で閉鎖されることになり、その工場跡地は、海軍工廠として利用されることになった。もともと人絹やスフを生産する化学工場として建造された建物は堅固であり、戦時中は空襲の被害を受けながらも何とかもちこたえた。戦後間もなく、この場所に進出してきた企業が設備を改装する際には、頑丈に造られた何本もの柱が改築の悩みの種であったという、関係者の話が伝えられている。また、沼津駅からの引き込み線の名残りとして、床面との段差を意図的につけ、荷物の積み降ろしを行ったプラットホームもまだ残されていた（この点については前掲書口絵写真⑰～⑳、本文写真⑱を参照していただきたい）。

東京人絹沼津工場跡地は、現在いくつかの区画に整理されて、電線を主に生産する工場などが操業しているが、かつてのような引き込み線は姿を消した。昨年、調査の過程で、この中の主要な会社の担当者の方に原料や製品の輸送について話をうかがうことができた。

鉄道輸送のメリットは認めつつも、高速道路網が整備された今、製品の受注の種類や量に柔軟に対応して、素早く出荷先に届けるには、トラック輸送に頼らざるをえないということであった。

東京人造絹糸吉原工場のその後

東京人絹吉原工場は、沼津工場に先立ち大正15年、人絹を生産することを目的に、従業員300名規模で周辺地域では有数の企業として操業を開始した。吉原工場では、昭和時代に入ると、東海道線の当時の鈴川駅（現吉原駅）から約3kmの引き込み線を敷き、石炭やパルプ、薬品などの原料の搬入や、人造絹糸やステープルファイバーなどの製品の出荷に利用した。工場敷地内では、専用のガソリン機関車をもち、貨車5輦で約60トンの積載が可能であったという。

だが、沼津工場と同様に戦争の影響で昭和17年に吉原工場は閉鎖され、他の軍需工場にその用地と施設を受け渡すことになった。そして、戦後昭和20年代になると、かつての引き込み線は、吉原の市街地を經由して、根方街道沿いに沼津市の西境に近い江尾までの約9kmに延長・整備されて、新たに岳南鉄道として営業を開始した。その軌道の一部は、大手の製紙工場の中を横切り、貨物輸送と旅客輸送の両方を取り扱う全国的にもユニークな私鉄として、大きな役割を果たしてきた。だが、最近では自家用車やトラック輸送が主力になったことや、不景気の影響で主要な顧客である製紙業が減産したことなどを背景に、東海道本線吉原駅の貨物取り扱い量が減少する中で、平成24年3月をもって、貨物の取り扱いを停止することになった。



▲かつての東京人絹吉原工場付近を通過する貨物列車
(平成24年3月)

まとめにかえて

今回の調査で、かつて大量輸送を支えた鉄道の機能・役割、そして時代とともに交通手段も変遷していくことを再認識した。調査を進める過程で沼津市明治史料館、沼津市歴史民俗資料館をはじめとした、多くの方々のご協力をいただいたことに感謝したい。

(平成22・23年度本館研究員 内田昌宏)

駿河湾の漁

芹沢松雄さんの漁話

ウズワのヒツパリ(曳き釣り漁)

今回は、チャカ(電気着火式軽油発動機搭載小型漁船)を走らせながらウズワ(ソーダガツオ)を釣る、ヒツパリの話をしよう。船に10本から12本のコバネ(釣竿)を固定して、釣糸の途中にキリコミ(潜航板)、ツリ(釣針)にはバケ(疑似餌)を付け、チャカでひっぱりながら釣る漁だ。

〈漁場のこと〉

漁場は千本から原のほうだった。だいたい魚が跳ねているところへいけば、出した竿は全部食って(魚がかかって)いった。まっすぐ船でひっぱっていけば、コバネへそれからそれへと魚がついて来るから、間が良きゃあ千本下で食い出して、原のほうまでまっすぐ行った。戻って来てそんなのを2回ぐらいやれば、100キロくらい釣れた。千本下から原までの大きな群れがいるのではなく、船に魚が付いて、あとから船を追っかけてきた。魚が離れると、また他へ走って行って群れを見つけた。魚の群れはどうせ見えないから、勘でこのへんからかと思ってやった。

〈漁の時間帯〉

ヒツパリもテジ(手釣り)も朝早めのほうがいい。夜が明けるか開けないイト(内)の、キリコミが見えるか見えないかってときに、もう食うことがあるから。日中食うときもあるけど、平均朝の方がいい。

ウズワは夏。昔専門にやっていたのは7月から9月だった。夏は夜が明けるのが早いから、3時や4時に起きた。そのときの夜明けによって時間がずれた。船の上で、まだ暗いイトに道具を付けた。

終日朝から晩まで釣れることもあった。1回江浦へ置いてきて、家へ帰ってご飯を食べて、また出かけた。そうすると夕方にまた買ってくれた。でも、いっぺんやると疲れるから、めったに2回行くことはなかった。

仕事でやったときは、江浦におろした。昭和35~6年ごろまでやっていた。もう昭和39年にはやっていなかったと思う。

〈バケ(疑似餌)のこと〉

バケは、海が晴れているときと濁っているときでは、違うものを使った。鳥の羽に赤い色を染めたものは、海が濁っているときにバケに1本混ぜて使った。晴れているときは、赤い羽根を入れると食いが悪く、白いだけのほうがいいみたいだ。

昔はみんな自分で作った。海の晴れ濁りによって、サバの皮が良いときとシイラの皮が良いときと、フグの皮が良いときと違って、そういう魚の習性を頭に入れて作ってある。サバ、シイラ、フグ、ボラなどの皮を剥いて使った。魚の皮を剥いて、一升瓶へ1匹の分

を乾くまで貼っておいた。竹筒でやる人もあった。

〈キリコミ(潜航板)のこと〉

キリコミは、船が走ると沈み、魚が食うとひっくり返って浮くようにできていて、これが浮くことで魚がかかったのがわかるようになっている。

魚がうんと深く潜ったときは、深いキリコミを使う。上に魚がいるときは、浅いキリコミを使う。キリコミが泳ぐ深さは、糸を付ける穴の位置によって変えられる。だけど、そこまで神経を使ったらやりきれないから、これくらいでいいらいい加減にしたいけれど。

キリコミは、ミチイトの穴の位置が真ん中に寄るほど深く潜りやすいが、深く潜るとバケが浮いてしまうので良くない。穴の位置とバケとでバランスをとらないといけな。穴をあけてみて、狩野川で投げちゃ泳がして、ひっぱって自分で研究した。木は桐を使った。そして、水をなるべく含まないようにペンキやニス塗った。おれは青いペンキばかりだった。

〈コバネ(釣竿)のこと〉

コバネ(ハネとも言う)は、ひとりの場合は10本、ふたりの場合は12本出した。船のトモに4本、キカンバの後ろに、両側に長いのを1本ずつ、中くらいののを1本ずつ、カトリ(道具を掛ける股木)に紐を結んで短いハネを1本ずつ吊り下げた。ふたりの場合はエンジンよりも前のほうに、長いのを両側に2本出した。後ろのコバネが3~4尋、長いのは5尋か6尋くらいある。短いのが1尋、中くらいのは2尋あるかな。全部コバネと言った。(次ページ図を参照)

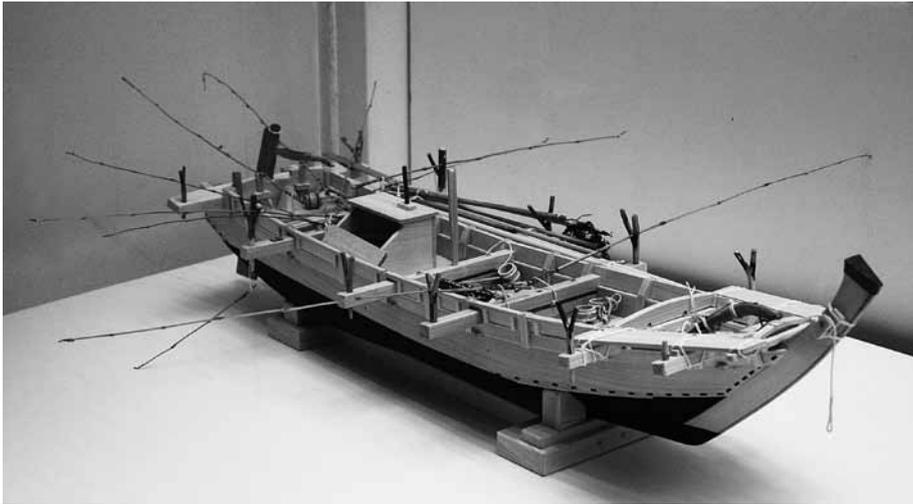
全部のコバネにフネ(キリコミ・潜航板)とバケを付けてひっぱるけど、うんと食うときには次々にフネが浮いてきて、全部の竿を見切れないから、だいたい片側の一番短いハネと、中くらいのハネの魚を上げた。釣れるときは、ほとんど片側に間に合った。中くらいのものを上げているイトに短いのが食うから、短いハネばかり上げることになって、他の竿についた魚は上げられなかった。それでも、一番扱いやすい短い竿から上げて行くのが効率が良かった。

〈釣糸のこと〉

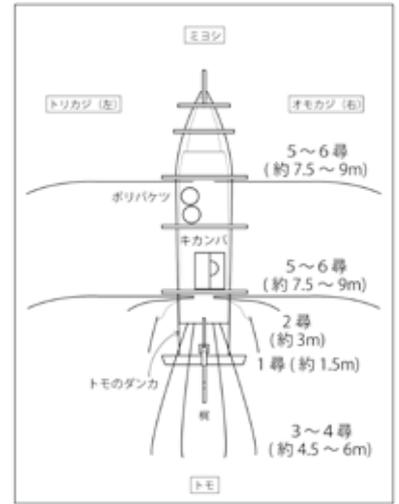
釣糸の長さは、コバネの長さで決めた。キリコミの位置は人によって、七三にしたり五五にしたりするが、おれはだいたい竿の真ん中に付けた。

長い竿では、竿よりも糸を長くしてしまうと魚の重みで竿が曲がって、魚を上げるときに自分よりもうんと魚が下へ行ってしまう。だからバケが竿より少し短いところに付くように作るとちょうど良かった。

逆に短い竿は、糸を少し長く作った。そして、竿ではなく糸の真ん中にキリコミを付けた。イカシ(釣針の返し)の付いたバケを手で外すのに、ちょうどよいところに魚が上がるように作った。



ヒッパリをするチャカ（模型製作：鈴木真司氏）



コバネの使用状況（上面図）

〈釣れたウズワを市場へ持ち込む〉

たくさん釣れたウズワは、トモのダンカ（排水できる船の棚）とポリバケツ2つに入れた。チャカには全部で180キロくらい積んだ。

江浦港に11時半かそこらに着くように行かなきゃだめだから、それ以上釣れても釣れなくても行った。セリをする時間に関係があるようだ。

市場では、持って行ったのは目方を量って、すぐに大きな入れ物へ入れた。そのときは値段がわからず、入れ物1杯が売れてから、後でいくらだかがわかった。

そのとき釣って持って行った人はみんな同じ値段になった。時間を過ぎて持って行くと、市場にはもう誰もいず、買ってもらえなかった。そうして置いていった魚は、セリにかけられて仲買や加工屋さんたちが来て買って行った。志下や獅子浜ではウズワは買ってくれなかった。江浦だけだった。

今はウズワのヒッパリを専門にする人はいないだろうね。たまにはウズワ節にするダシをとりに行く衆らはあるけれど。

（話：芹沢松雄氏 沼津市我入道在住）

資料館からのお知らせ

企画展の開催について

本年度の企画展「海辺の情景」～絵葉書に見る地先の漁場～を、平成25年1月14日から4月15日までの日程で開催します。

この企画展は、平成22年3月に国重要有形民俗文化財に指定された「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」が使われた、地先の漁場の姿を知っていただくことを目的として、古い絵葉書に残された海岸の写真を中心に、漁場に関連する資料を紹介するものです。

歴民講座の開催について

下記のとおり、歴民講座を開講します。今回は、少しジャンルを変え、戦国時代の沼津の歴史についての講座の内容としました。

期日 平成25年1月27日(日)午後1時30分から

会場 市立図書館 4階 視聴覚ホール

内容 「甲斐武田氏と沼津」～三枚橋城将高坂源五郎を探る～

※ 事前申し込みが必要です。12月21日(金)から電話での受付を開始します。(TEL. 932-6266)

体験学習「火を起こす・火を使う」の開催結果について

本年度の体験学習は、「火を起こす・火を使う」と題して、平成24年11月11日(日)に、資料館のピロティで開催しました。昔の人々がどのようにして火を起こして使ったのかを、古代の舞い錐、江戸時代の火打ち石と灯明、近代のマッチとかまど焚きを体験しながら学びました。

舞い錐では、ほとんどの人が火種を作ることにはできませんでしたが、炎を出すようにするのが大変でした。

沼津市歴史民俗資料館だより

2012.12.25 発行 Vol.37 No.3 (通巻196号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp